

## 「晩年時代」の太宰文学の一側面

— 戦後文学と聖書 —

長 濱 拓 磨

〈 요약 〉

본고는 졸고「쓰가루(津軽) 피난 시대의 다사이(太宰) 문학의 한 측면 - 전후 문학과 성서 -」의 속편이다. 1946년 11월, 다사이(太宰)는 쓰가루(津軽)에서의 피난 생활을 끝내고 동경(東京)에 돌아온다. 그리고, 전후 첫 베스트셀러 「사양(斜陽)」을 낳아, 「인간 실격(人間失格)」에 의해서 시대의 총아로서 부동의 인기를 확립해, 1948년 6월 다마가와(玉川) 상수에서 생애를 끝낸다. 본고에서는 다사이(太宰)가 동경(東京)에 돌아와, 자살을 이룰 때까지의 시기(1946.11~1948.6)를 「만년 시대」라고 부르는 것으로 해, 이 시기에 있어서의 다사이(太宰) 문학을 성서적 측면에서 본다. 열쇠가 되는 4개의 시점, 「교양」으로서의 성서, 「성모」의 이미지, 그리스도의 형상화(「사양(斜陽)」), 「신」의 호소(「비운의 아내」「인간 실격(人間失格)」) 으로부터 고찰했다.

はじめに

本稿は拙稿「津軽疎開時代の太宰文学の一側面 — 戦後文学と聖書 —」<sup>1)</sup>の続編である。拙稿では太宰が津軽の実家に疎開していた「津軽疎開時代(1945.8~1946.11)」に書かれた小説と戯曲に注目し、その聖書の側面を論じた。例えばこの時期の作品では新約聖書それもマタイ伝が主として引用されていること。引用箇所の内容も「自由思想」「隣人愛」「赦し」「教訓」という4つの位相に分類されること。「人生の教師」としてのイエス像を描こうとした形跡があること。そこから聖書を信仰的ではなく倫理的理想的に捉える太宰の姿が浮かび上がることなどを指摘した。

こうした1年3カ月にわたる「津軽疎開時代」を経て、1946年11月、終生の地・東京三鷹に戻った太宰は戦後初のベストセラー『斜陽』を生み出し、『人間失格』によって時代の寵児として不動の人気を確立し、1948年6月玉川上水で生涯を終える。本稿では太宰が東京へ戻り、自殺を遂げるまでの時期(1946.11~1948.6)を「晩年時代」と呼ぶこととし、この時期の太宰文学を聖書の側面から見ていくこととする。

「晩年時代」の太宰作品は小説に限定すると、『トカトントン』(「群像」, 1947年1月)と同時に発表された『メリイクリスマス』(「中央公論」, 1947年1月)を皮切りに、『ヴィヨンの妻』(「展望」, 1947年3月), 『斜陽』(初出:「新潮」, 1947年7~10月)などの問題作を経て、1948年6月、太宰の自殺前後に発表された、『人間失格』(初出:「展望」, 1948年6~8月), 『グッド

バイ』（未完／初出：「朝日新聞」，1948年6月21日，「朝日評論」，1948年7月）までである。

この時期の聖書引用は、「津軽疎開時代」と同じくほとんどが新約聖書，それもマタイ伝からであるが，創世記（『父』），詩篇（『桜桃』）などの旧約聖書，ヨハネ伝（『美男子と煙草』）などからも見られ多様化の傾向がある。聖書引用の方法も「津軽疎開時代」で登場人物の思想を代表するものとして聖書を理想的に捉えていたことと異なり，「晩年時代」では登場人物の様々な思想の一部として聖書が相対的に捉えられている。例えば，何気ない会話の中に聖書と関連する話題が「教養」として盛り込まれている点などである。聖書の「日常化」が行なわれていると言えよう。ただし，表層的に聖書が「日常化」される一方で，「聖母」や「イエス」のイメージ，「神」という言辞など主題と関わる部分で聖書の色彩が色濃く見られ，より深い聖書の主題が追究されていることは確かである。そこで本稿では，「晩年時代」の太宰文学の聖書の側面を，「教養」としての聖書，「聖母」のイメージ，「イエス」の形象化（『斜陽』），「神」をめぐる言説（『人間失格』）という4つの側面から考えていくこととする。

## 1. 「教養」としての聖書

まず「晩年時代」の太宰文学における聖書引用の問題を考える。周知の通り「晩年時代」に限らず多くの太宰作品には私小説的要素があり，「太宰」を連想させる人物が数多く登場する。ほとんどの主人公が「太宰」をモデルとしていると言ってもよいだろう。また，「晩年時代」の特徴としては『メリイクリスマス』や『斜陽』で，教養があり，身分の高い女性が登場することも注目される。「津軽疎開時代」ではあまり見られなかった傾向であるからだ。こうした様々な登場人物は「太宰」の思想を代弁するものであるが，「津軽疎開時代」とは異なり，「人生の教師」としてイエスに敬意を寄せることよりも，いわゆる「教養」として聖書を引き合いに出した会話をするのが多いのももう一つの特徴と言える。しかも，「晩年時代」の聖書引用のほとんどは登場人物の語りの中に盛り込まれ，登場人物の「教養」の高さを証明するために使われているのだ。そこで以下作品の発表順に聖書関連箇所を確認していきたい。

『メリイクリスマス』では「笠井さん」の思い出の人物として貴族の夫人が登場する。この夫人は「笠井さん」と同じ年齢であり，広島原爆で命を落とす。「所謂貴族の生れで，美貌で病身で」，「大金持ちの夫と別れて，おちぶれて，わずかの財産で娘と二人でアパート」に住んでいた苦労人である。また，恋愛感情のもつれもなく，「笠井さん」が恐縮することなく再会できる「唯一のひと」であった。他人に対する深い配慮と高い教養を備えた聡明な夫人のようで，そのことを示すエピソードの一つとして聖書を話題にする。次の場面である。

いつの時代でも本当の事を言ったら殺されますわね，ヨハネでも，キリストでも，そうしてヨハネなんかには復活さえ無いんですからね，と言った事もあった。

（『メリイクリスマス』）

ここでは「笠井さん」に対する夫人の配慮として、本当の事をいうことの困難さを語ったものである。夫人は聖書を引き合いに出して話を進める。夫人の高い「教養」を窺い知れよう。

『父』（「人間」, 1947年4月）はアブラハム、佐倉宗吾郎、「私」の3つの義をめぐる物語である。第1のアブラハムの物語は、中心となる聖書該当箇所（創世記22章7節）がエピグラムとして引用されるところから始まり、イサクを神への捧げものとしたアブラハムの苦悩が詳細に語られる。第2の佐倉宗吾郎の物語は、「私」が昔見た映画の佐倉宗吾郎に触れ、中でも特に印象的な子別れの場面が語られる。第3の「私」の物語は、子供や妻を犠牲にしてまでも命がけで遊ぶ「私」の姿が語られる。この「私」が「太宰」をモデルにしていることは言うまでもないだろう。そして、「私」の物語の最後では次のような結論が下される。

義。

義とは？

その解明は出来ないけれども、しかし、アブラハムは、ひとりごを殺さんとし、宗吾郎は子わかれの場を演じ、私は意地になって地獄にはまり込まなければならぬ、その義とは、義とは、ああやりきれない男性の、哀しい弱点に似ている。（『父』）

ここを見ると「私」が3つの物語を、義のために子供を犠牲にした父の物語として等価に位置づけようとしていることがよくわかる。つまり、「私」をアブラハムや佐倉宗吾郎と同等の困難に直面した人物とする「神話化」の作業がなされているのである。中心となるのは「私」の物語であり、創世記のアブラハムの物語はあくまでも「私」を「神話化」するための道具に過ぎない。また同時に「私」がアブラハムや佐倉宗吾郎の物語を読者に向けて語ることは自身が「教養」を持った人物であることを暗に示している。

『朝』（「新思潮」, 1947年7月号）は、「私」が知り合いの娘と過ちを起こしそうになるのを回避する話である。この「私」もまた「太宰」がモデルであろう。事件は「私」が酔って動けなくなり仕方なく娘の部屋に泊った夜に起った。停電のため真っ暗な娘の部屋で、このままでは娘と過ちを犯しそうになる危険を感じた「私」が、状況を変えるために娘にろうそくをつけてもらうよう依頼する。娘は言われた通り、ろうそくをつけて、「私」と次のように会話を交わす。

「どこへ置きましょう。」

「燭台は高きに置け、と**バイブルに在るから**、高いところがいい。その本箱の上へどうだろう。」

「お酒は？ コップで？」

「**深夜の酒は、コップに注げ、とバイブルに在る。**」（傍線部引用者／『朝』）

1番目の傍線部はマタイ伝5章15節からの引用である。2番目の傍線部はもちろん冗談であり

聖書にそんなことは書いていない。赤司道雄氏によると、「こうした、諧謔的な、福音書の引用は非常に珍しい」<sup>2)</sup>とのことだが、わざと冗談めいて会話することで場の雰囲気や和ませようとしている「私」の必死さが窺えよう。また同時に聖書の知識があることをひけらかそうとするバダンチックな「私」の軽薄さも垣間見ることが出来る。

『斜陽』は様々な問題を抱えている作品であるが、まずは聖書引用の部分に限定して考える。この小説でも教養ある登場人物が会話や語りの中で聖書を引用する。意外なことに最も教養がありそうなかず子の母は聖書に関連した話をしない。代わりに母の様子を伝えるかず子や直治が聖書を繰り返し引用する。さらには上原も直接話題にはしないが、取り巻きたちの会話の中で聖書が取り上げられる。以下、聖書を引用したかず子、直治、上原の取り巻きたちの順に該当箇所を考えていきたい。

第一にかず子。かず子は華族の家柄に生れた29歳で、離婚経験者である。どのような学校かはよくわからないが少なくとも女学校を卒業しており、度々文学の話をする文学少女の一面がある。聖書に関する知識も豊富な事から深い教養を持った人物であることが窺える。そんな彼女が最初に聖書について言及するのは、火事騒動のあと母親に慰められて気持ちが楽になる場面である。

私は急に楽しくなって、ふふんと笑った。機にかないて語る言は銀の彫刻物に金の林檎を嵌めたるが如し、という聖書の箴言を思い出し、こんな優しいお母さまを持っている自分の幸福を、つくづく神さまに感謝した。  
(傍線部引用者／『斜陽』)

「聖書の箴言」とあるように箴言25章11節の引用である。とっさに聖書を思い出していることから普段から聖書をよく読んでいることが推測される。ここでは「知恵の書」と呼ばれる箴言から引用することで母の聡明さや優しさを象徴している。

次にかず子は上原への手紙で繰り返しマタイ伝を引用する。中心となるのはマタイ伝10章16節の「蛇のごとく慧く、鴿のごとく素直なれ」<sup>3)</sup>とマタイ伝10章27節「身と霊魂とをゲヘナにて滅し得る者」<sup>4)</sup>の聖句である。前者は3回、後者は2回繰り返される。圧巻は『斜陽』「六」で母が亡くなったあと、かず子が新しい生き方として上原への恋に生きる決意をする場面である。イエスが弟子たちに命令したことを思い合わせ、マタイ伝10章9節から10章39節まで途中いくつか省略をはさみながらもその大部分を引用する。ここでの聖書解釈にはズレ<sup>5)</sup>があるようだが、かず子が世間の道徳とたたかおうとする強い意志を裏付けるものとなっている。かず子は聖書を利用して自分の行動に対して自己正当化をはかっているのだ。

第二に直治。直治はかず子の弟であり、高等学校に通っている時麻薬中毒になった。中毒とは言え大学に進学していることから当時としては相当の教養は持ち合わせていると考えられる。その彼が最初に聖書と関連する話をしたのは、母の臨終の場面である。母が死を覚悟して、かず子と直治を呼びよせた時に、直治は死につつある母を見ていられず次のように冗談めかして言う。

「わあ、また愁歎場か。汝等は、よく我慢してあそこに頑張っておれるね。神経が太いんだね。薄情なんだね。我等は、何とも苦しくて、実に心は熱すれども肉体よわく、とてもママの傍にいる気力は無い」  
(傍線部引用者／『斜陽』)

傍線部はマタイ伝 26 章 41 節「實に心は熱すれども肉體よわきなり」を基にした言葉である。マタイ伝のこの箇所は、イエスが十字架で死ぬことを予見しつつゲッセマネの園で祈っている時、一緒に祈ることができず眠ってしまった弟子たちに対するイエスの叱責の言葉であった。直治はイエスの言葉を叱られた弟子の立場から居直りの言葉として使っているのである。そこには直治の屈折した心情を読み取れる。

次に直治は遺書の中で、貴族という自らの出身階層に対する愛憎をユダにたとえて訴える。

姉さん。

いったい、僕たちに罪があるのでしょうか。貴族に生れたのは、僕たちの罪でしょうか。ただ、その家に生れただけに、僕たちは、永遠に、たとえばユダの身内の者みたいに、恐縮し、謝罪し、はにかんで生きていなければならない。  
(傍線部引用者／『斜陽』)

直治は貴族の家に生れた罪をユダの身内に喩える。人間にはどうすることもできないこの深い原罪意識は、「生れて、すみません」という「太宰」の有名な言葉と通じるものがある。

そして最後に上原の取り巻きたちである。彼らは、上原と共に酔った席で聖書を話題にする。長い引用になるので、便宜上番号をつけておく。

「①二羽の雀は一銭、とは、ありゃ高いんですか？ 安いんですか？」

と若い紳士。

「②一厘も残りなく償わずば、という言葉もあるし、③或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラントなんて、ひどくややこしい譬話もあるし、キリストも勘定はなかなかこまかいんだ」

と別の紳士。

「それに、あいつあ酒飲みだったよ。妙にバイブルには酒の譬話が多いと思っていたら、果せるかなだ、④視よ、酒を好む人、と非難されたとバイブルに録されてある。酒を飲む人でなくて、酒を好む人というんだから、相当な飲み手だったに違いねえのさ。まず、一升飲みかね」

ともうひとりの紳士。

「よせ、よせ。ああ、あ、汝らは道德におびえて、イエスをダシに使わんとす。チエちゃん、飲もう。ギロチン、ギロチン、シュルシュルシュ」

と上原さん、(以下略)

(番号・傍線部引用者／『斜陽』)

以上4か所である。酔っ払いの会話だけに次々と話題が変わりとりとめがなく、聖書も同じマタイ伝であるのに全く別々の章から引用されている。傍線部①はマタイ伝10章29節「二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに、汝らの父の許なくば、その一羽も地に落つること無からん。」。傍線部②はマタイ伝5章26節「まことに汝に告ぐ、一厘ものこりなく償はずば、其處をいづること能はじ。」。傍線部③はマタイ伝25章15節「各人の能力に應じて、或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラントを與へ置きて旅立せり。」。傍線部④はマタイ伝11章19節「人の子來りて飲食すれば、「視よ、食を貪り酒を好む人、また取税人・罪人の友なり」と言ふなり。されど智慧は己が業によりて正しとせらる』」。このうち傍線部①のマタイ伝10章29節は先にかず子が「六」でマタイ伝を引用した際省略した部分であるが、他の個所は『斜陽』の中で関係する部分はない。

ただ、酔っ払いとはいっても「紳士」であるだけに、それなりの教養を持った人物たちであり、自分たちの教養をひけらかすために聖書的话题をしたものと言えよう。最後に発言した上原は聖書を話題にしてはいるが「紳士」たちの聖書的话题を理解した上で、「イエスをダシに使」おうとしていると結論付けている。「紳士」たちと同程度の聖書知識があるからこそ出来る発言であろう。

『美男子と煙草』（「日本小説」, 1948年1月）は「私」が上野公園の浮浪児たちを取材した報告書の形式をとっている。ここでは珍しく「私」の名前が「太宰」であることを明らかにしている。「太宰」のルポルタージュ形式となっている。そして、この報告は最後に次のような結論が下されている。

天使が空を舞い、神の思召により、翼が消え失せ、落下傘のように世界中の処々方々に舞い降りるのです。私は北国の雪の上に舞い降り、君は南国の蜜柑畑に舞い降り、そうして、この少年たちは上野公園に舞い降りた、ただそれだけの違いなのだ、これからどんどん生長しても、少年たちよ、容貌には必ず無関心に、煙草を吸わず、お酒もおまつり以外には飲まず、そうして、内気でちょっとおしゃれな娘さんに気永に惚れなさい。（『美男子と煙草』）

ここに登場する「私」、「君」、「少年たち」はそれぞれ北国出身の語り手、南国出身の読者、上野公園の浮浪児を指す。つまり、北国、南国、東京と日本全国のほとんどの人たちは地上に降りた天使であり、その中心となるのが上野公園の浮浪児ということになる。こうした発想は浮浪児を「イエス」と呼んだ、石川淳の『焼跡のイエス』（「新潮」, 1946年10月）に通ずる。

この小説ではさらに、結論に加えて「附記」として取材時の写真をめぐるエピソードが紹介される。ここで聖書が引用されている。

この時うつした写真を、あとで記者が持って来てくれた。笑い合っている写真と、それからもう一枚は、私が浮浪児たちの前にしゃがんで、ひとりの浮浪児の足をつかんでいる甚だ妙

なポーズの写真であった。もしこれが後日、何か雑誌にでも掲載された場合、太宰はキザな奴だ、キリスト気取りで、あのヨハネ伝の弟子の足を洗ってやる仕草を真似していやがる、げえっ、というような誤解を招くおそれなしとしないので一言弁明するが、私はただはだしで歩いている子供の足の裏がどんなになっているのだろうという好奇心だけであんな恰好をしただけだ。  
(傍線部引用者／『美男子と煙草』)

ヨハネ伝 13 章のキリストが弟子の足を洗う話を引用して「太宰」が「キリスト気取り」をしていると誤解されないか恐れている場面である。果して読者が「太宰」の言うような誤解をするほど聖書のエピソードを知っているのかは疑問であるが、裏を返せば、「太宰」は自身が「キリスト気取り」をしているのではないかという疑念を隠し切れていないのである。

『渡り鳥』（「群像」1948年4月）では語り手が聖書関連の言葉を発する場面が2回ある。聖書関連というのは、聖書をそのまま直接引用するのではなく、編集した言葉を語っているからである。最初は次の場面である。

トイレットの中か、または横丁の電柱のかげで酔っていながら、残金を一枚二枚と数えて、溜息ついて、思い煩うな空飛ぶ鳥を見よ、なんて力無く呟いてさ、いじらしいものだよ。実は、僕にも覚えがあらあ。  
(傍線部引用者／『渡り鳥』)

傍線部はマタイ伝 6 章 25 節「この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を著んと體のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、體は衣に勝るならずや。」とマタイ伝 6 章 26 節「空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遙に優る者ならずや。」を編集してつなぎ合わせた言葉である。続いて別の個所ではさらに編集が進む。

しかし、また、敵を愛すべし。僕は、僕を活気づける者を愛さずにはおられない。僕らの敵手は、いつも僕らを活気づけてくれますからね。  
(傍線部引用者／『渡り鳥』)

基となる聖句はマタイ伝 19 章 19 節「汝等おのれを愛するが如く、汝の隣人を愛せ」であろうが、原典の「汝の隣人を愛せ」のうち「汝の隣人」を「敵」、「愛せ」を「愛すべし」としてより激しい語調へと改変している。このような編集は、先に述べた「日常化」の作業でもあり、「太宰」が聖書を咀嚼して独自の解釈をほどこしたものと言えよう。

『桜桃』（「世界」1948年5月）は主として詩篇から引用されている。「晩年時代」の太宰文学における聖書引用のほとんどがマタイ伝であることを考えると詩篇の引用は珍しい。本文ではまずエピグラムから詩篇が引用される。

われ、山にむかいて、目を挙ぐ。

— 詩篇、第二百一十一。

(『桜桃』)

原典は詩篇 121:1 「われ山にむかひて目をあぐ わが扶助はいづこよりきたるや」であるが、この続きを見ると 121:2 「わがたすけは天地をつくりたまへるエホバよりきたる」と神の救いを賛美する内容となっている。『桜桃』ではこの続く部分がないため、困難な状況の中で救いを求める孤独な人間の姿を浮かび上がらせている。また、本文中で繰返されるキーワードの「涙の谷」も詩篇 84:6 に出て来る言葉であるが、原典では神と共にある人はどんな困難な状況＝「涙の谷」にあっても大丈夫という文脈で使われているのに対し、作品中では「私」の妻が自分の困難な状況を「涙の谷」と表現しているのと同じ困難な状況＝「涙の谷」ではあっても文脈が異なる。ここにも「太宰」の編集作業を垣間見ることが出来る。

最後に『人間失格』である。『人間失格』には聖書を直接引用した箇所はないものの、聖書やキリスト教に関連した言葉が多く散見され全体として聖書的世界観で統一されている。その中で聖書ともっとも深い関連が見られるのは次の箇所である。

しかし、それよりも、肉親と他人、故郷と他郷、そこには抜くべからざる演技の難易の差が、どのような天才にとっても、たとい神の子のイエスにとっても、存在しているものなのではないでしょうか。  
(傍線部引用者／『人間失格』)

イエスが故郷で受け入れられなかった話はマタイ 13 章 57 節、マルコ 6 章 4 節、ルカ 4 章 24 節、ヨハネ 4 章 44 節に出て来る。大庭葉蔵は故郷で受け入れられなかったこれらのイエスのエピソードを持ち出して自分とイエスを比較しつつ喩えとして出しているのである。大庭葉蔵の胸の中でイエスの存在がいかに大きな位置を占めていたかを示している。

## 2. 「聖母」のイメージ

「晩年時代」の太宰文学では単なる聖書引用だけではなく、聖書を基にした様々なイメージが散見される。そのうちの一つとしてここでは「聖母」のイメージを考える。

「晩年時代」の太宰文学における「聖母」のイメージは『斜陽』に登場するかず子の母に代表される。かず子の母は「日本最後の貴婦人」であり、娘や息子のために苦しんだ犠牲者でもあった。そして最後の姿はかず子から「ピエタのマリヤ」に形容された。そもそも「ピエタ」とはイタリア語で「哀れみ・敬虔」の意味があり、一般的には「キリストの遺体を膝に抱いて悲しむ聖母マリアの図像。嘆きの聖母像。」<sup>6)</sup>を指す。つまり、かず子の母には「高貴」と「犠牲」、「哀れみ」という3つの属性が備わっていることになる。そこでこれらの3つを中心として「聖母」のイメージを考えていきたい。対象となるのは『メリイクリスマス』『母』『斜陽』『饗応夫人』『人



間失格』の5作品である。

前章にも述べたが『メリイクリスマス』では「笠井さん」と交遊のあった夫人の思い出が語られる。夫人は「貴族の生れ」という「高貴」な身分であり、大金持ちの夫との離婚、娘との貧困生活、そして疎開先の広島で原爆のために亡くなるという様々な「犠牲」を強いられた人物でもある。他人に対する配慮も行き届いており、「笠井さん」にも同情を寄せる。この時の同情は愛情と言うよりも「哀れみ」や慈愛に満ちたものと言える。いわば、「高貴」、「犠牲」、「哀れみ」という『斜陽』のかず子の母と共通するイメージをもっているのだ。そのため、この夫人は「聖母」と呼ばれることはないが、「聖母」として十分な資格を持った人物であると言えよう。

『母』（「新潮」、1947年3月）は「日本海に面した或る港町の、宿屋」に宿泊した「私」の体験談である。「私」は宿屋で働く「四十前後の、細面の、薄化粧した女中」がきれいな声をしていることが気にかかる。眠れない夜を過ごしていると隣室から「帰還の航空兵」と先程の「きれいな声をした年増の女中」が会話をしている声が聞こえて来る。「私」が盗み聞きをしていると、2人の会話は航空兵の両親に及ぶ。父は亡くなっており、母が一人で待っているというのだ。問題は母の年齢が38歳ということである。若者から母の年齢を聞いた女中は黙ってしまう。おそらく女中と同じぐらいの年齢だったからであろう。若者はそんな女中の様子も分からず、やけどの治療を申し出て電気をつけようとする。その時、女中は激しく拒絶する。隣室で盗み聞きをしていた「私」も心の中で同意する。次の個所である。

隣室の先生は、ひとりうなずく。電気を、つけてはいけない。聖母を、あかるみに引き出すな！  
(傍線部引用者／『母』)

ここで「聖母」と呼ばれているのは勿論「きれいな声をした年増の女中」である。この女中に子供がいるのかどうかはよくわからないが、母親の年齢を聞いて以降女中は若者に対して母親的態度で接するようになる。そんな女中の切ない心情を察した「私」は女中のことをあえて「聖母」と呼んだのである。

『斜陽』で、かず子の母に「聖母」のイメージが付与されていることは先程述べた。ここで問題となるのはかず子の母だけではなく上原の妻にも「聖母」のイメージが見られる点である。上原の妻は作品中ではほとんど登場しないが、かず子が上原の自宅を訪ねた時に出会い、直治が密かに思いを寄せる相手であったことから重要な登場人物の一人である。上原の妻に初めて出会ったかず子は「細おもての古風な匂いのする、私より三つ四つ年上のような女のひと」という印象を持った。直治は遺書の中で上原の妻が夫の「犠牲」となり苦勞をしている姿に同情を寄せ、瞳の美しさを賞賛する。

高貴、とでも言ったらいいのかしら。僕の周囲の貴族の中には、ママはとにかく、あんな無警戒な「正直」な眼の表情の出来る人は、ひとりもいなかった事だけは断言できます。

(傍線部引用者／『斜陽』)

ここで直治が上原の妻を「高貴」と表現していることに注意をしてもよいだろう。上原の妻は貴族階級の出身ではないが、精神的な気品の高さがあることを裏付けている。こうした「犠牲」と「高貴」という二つの属性はかず子の母に通ずるものがある。さらに付け加えると、かず子の母が「ピエタのマリヤ」として絵画的イメージで捉えられているのと同様に、上原の妻も直治から絵画的イメージで理想化して捉えられている。次の箇所である。

それから僕は、或る冬の夕方、そのひとのプロフィールに打たれた事があります。(中略) 東京の冬の夕空は水色に澄んで、奥さんはお嬢さんを抱いてアパートの窓縁に、何事も無さそうにして腰をかけ、奥さんの端正なプロフィールが、水色の遠い夕空をバックにして、あのルネッサンスの頃のプロフィールの画のようにあざやかに輪郭が区切られ浮んで、僕にそっと毛布をかけて下さった親切は、それは何の色気でも無く、慾でも無く、ああ、ヒューマニティという言葉はこんな時にこそ使用されて蘇生する言葉なのではなからうか、ひとの当然の侘びしい思いやりとして、ほとんど無意識みたいになされたもののように、絵とそっくりの静かな気配で、遠くを眺めていらっしやう。

(傍線部引用者／『斜陽』)

直治は上原の妻の「プロフィール」＝横顔を「あのルネッサンスの頃のプロフィールの画のように」「絵とそっくりの静かな気配」と絵画的イメージを利用して説明する。しかも子供と共に窓に腰かけている姿は聖母子像を想起させる。青木京子氏は、この場面における上原の妻について「ヨーロッパのキリスト教美術の〈伝統的〉な〈聖母子〉像を想定して描かれたのではなからうか<sup>7)</sup>」と指摘されている。十分に説得力のある指摘である。

さらに、『斜陽』では母の死後、かず子は世間の道徳と闘う「道徳革命」を目指していくが、そのために上原の子を生み、「聖母子」として世間の偏見に負けずに生きることを決意する。

マリヤが、たとい夫の子でない子を生んでも、マリヤに輝く誇りがあつたら、それは聖母子になるのでございます。

(『斜陽』)

聖書によるとマリヤは聖霊により身ごもりイエスを生んだ。つまりイエスは夫の子ではない。そんな逆境に対してマリヤは信仰によって乗り越えていくわけだが、かず子はそれを信仰ではなく「輝く誇り」として人間的な感情へと置き換えている。また、「夫の子でない子」という表現にはマリヤがローマの兵士に強姦されてイエスを生んだという俗説<sup>8)</sup>を連想させるようなニュアンスもある。いずれにしろかず子は人間的な感情や努力、自尊心といったところから独自の「聖母

子」論を展開して自身の「革命」の目標にしたのである。

『饗応夫人』（「光」, 1948年1月）には自分の身を犠牲にして人々に饗応をふるまう奥さまが女中の目を通して描かれる。この奥さまに対して「聖母」という言葉は出てこないが、これまでの太宰作品で見てきた「高貴」, 「犠牲」, 「哀れみ」の3つの属性が見られ、限りなく「聖母」に近い人物として語られる。奥さまは夫の友人である笹島先生へ「哀れみ」を持って接し、お金を浪費し健康まで脅かされる大きな「犠牲」を払いながら接待のために狂奔する。そうした奥様の姿は結末において「高貴」ある姿として女中の目に映る。

泣くような笑うような不思議な声を挙げて、若い女のひとたちにも挨拶して、またもくるくるコマ鼠の如く接待の狂奔がはじまりまして、私がお使いに出されて、奥さまからあわてて財布がわりに渡された奥さまの旅行用のハンドバッグを、マーケットでひらいてお金を出そうとした時、奥さまの切符が、二つに引き裂かれているのを見て驚き、これはもうあの玄関で笹島先生と逢ったとたん、奥さまが、そっと引き裂いたのに違いないと思ったら、奥さまの底知れぬ優しさに呆然となると共に、人間というものは、他の動物と何かまるで違った貴いものを持っているという事を生れてはじめて知らされたような気がして、私も帯の間から私の切符を取り出し、そっと二つに引き裂いて、そのマーケットから、もっと何かごちそうを買って帰ろうと、さらにマーケットの中を物色しつづけたのでした。

（傍線部引用者／『饗応夫人』）

奥さまは過度な笹島先生への接待のために体調を崩し、福島県の実家に帰るつもりで切符を持っていた。だが、駅に向かう途中で笹島先生に出会ったとたん、実家に帰るのを止めてしまう。切符を破り、再び笹島先生への接待の狂奔がはじまる。そんな奥さまの「高貴」な姿に圧倒され、語り手の女中は感動すら覚えている。このように「高貴」で「犠牲」的に他人へ献身し、他人への「哀れみ」に溢れる奥さまは「聖母」と呼んでもいいかもしれない。

『人間失格』には一カ所だけ「マリヤ」という言葉が出て来る。「マリヤ」とは言うまでもなくイエスの母である「聖母マリヤ」のことである。「マリヤ」と「聖母」は同じ意味で使われている。次の個所である。

自分には、淫売婦というものが、人間でも、女性でもない、白痴か狂人のように見え、そのふところの中で、自分がかえって全く安心して、ぐっすり眠る事が出来ました。みんな、哀しいくらい、実にみじんも慾というものが無いのです。そうして、自分に、同類の親和感とでもいったようなものを覚えるのか、自分は、いつも、その淫売婦たちから、窮屈でない程度の自然の好意を示されました。何の打算も無い好意、押し売りでは無い好意、二度と来ないかも知れぬひとへの好意、自分には、その白痴か狂人の淫売婦たちに、マリヤの円光を現実に見た夜もあったのです。

（傍線部引用者／『人間失格』）

ここで大庭葉蔵は淫売婦たちを「白痴か狂人」と呼んでいるが、そもそもこの手記は大庭葉蔵が狂人として精神病院に監禁され人間としての資格を喪失した「人間失格」者という自覚のもとに執筆されたものであった。いわば、淫売婦たちは大庭葉蔵と同様の「人間失格」者であるのだ。とすれば、淫売婦たちから大庭葉蔵に寄せられた様々な「好意」は、同じ「人間失格」者としての共感ということになる。しかも、「白痴か狂人の淫売婦たち」に「マリヤの円光」を見たということは、「狂人」である大庭葉蔵を「神様みたいないい子」だとするのと同じ論理である。すなわち、世間的には「白痴か狂人」のような「人間失格」者が実は「神」に近い存在であるという逆説である。ここでの「マリヤの円光」とはマリヤの神聖性を示すものであり、これまでの「聖母」のイメージを補完するものでもある。

### 3. 「イエス」の形象化～『斜陽』

前章では『斜陽』においてかず子の母と上原の妻に「聖母」のイメージが付与されていることとかず子も「聖母子」を目指していることを確認した。これらの「聖母」や「聖母子」のイメージに関しては既に多くの指摘があるので、ここでは別の聖書の側面を考えていきたい。すなわち、かず子の母における「イエス」の形象化の問題である。

『斜陽』はかず子の独白を中心として、かず子が上原に出した3通の手紙、そして直治の夕顔日誌と遺書が挿入された物語である。そのため、母の内面描写は一切なく、あくまでもかず子の視点から母の言動が語られる。これは福音書で「イエス」の内面描写がなく、弟子たちの視点から「イエス」の言動が語られることとよく似た構造だと言える。しかも母に関するかず子や直治の言動を整理すると、母を「イエス」のイメージで、かず子や直治は「イエス」の弟子のイメージで捉えている節がある。そこで、こうした「イエス」の形象化の問題を順番に追って行きたい。

かず子と母が最初に聖書と関連した会話をするのは復活をめぐる話である。「一」にある。きっかけは東京から伊豆の山荘へと引っ越して来た時の気持ちをかず子の母が語ったことだった。

「神さまが私をいちどお殺しになって、それから昨日までの私と違う私にして、よみがえらせて下さったのだけわ」  
 (『斜陽』)

かず子の母は生活が激変した中で、気持ち大きく変わったことを説明する。ここで「神」が殺して蘇らせるというのはキリスト教的な復活観とは明らかに異なる。しかし、「イエス」の立場に立って考えると「神」が「イエス」を十字架で殺して復活させたとも言える。いわば、かず子の母は「イエス」の立場を密かにイメージしているのである。後にかず子がこの時の母の言葉を思いつく中で次のように補足していることも例証となろう。

ああ、こうして書いてみると、いかにも私たちは、いつかお母さまのおっしゃったように、

いちど死んで、違う私たちになってよみがえったようでもあるが、しかし、イエスさまのよ  
うな復活は、所詮、人間には出来ないのではなからうか。 (傍線部引用者／『斜陽』)

母が密かに「イエス」の立場をイメージして「復活」らしき話をしているのに対し、かず子はあくまでも人間の立場から復活を否定し、母の限界すなわち母の死を予感させるものとして語っている。

「二」では火事騒動のあと、慰めてくれた母の優しさにかず子は感動して、「聖書の箴言を思い出し、こんな優しいお母さまを持っている自分の幸福を、つくづく神さまに感謝」する。かず子の母に対する尊敬の気持ちがキリスト教的な宗教性を持っていることを示している。

「四」でかず子は上原へ3通の手紙を書く。手紙でかず子は上原へ自分の気持ちを徐々に明かす。上原が世間で「札つきの不良」と呼ばれていることに対し、世間の偏見と闘う決意を明らかにする。

世間でよいと言われ、尊敬されているひとたちは、みな嘘つきで、にせものなのを、私は知っているんです。私は、世間を信用していないんです。札つきの不良だけが、私の味方なんです。札つきの不良。私は、その十字架にだけは、かかって死んでもいいと思っています。万人に非難せられても、それでも、私は言いかえてやれるんです。お前たちは、札のついていないもっと危険な不良じゃないか、と。 (傍線部引用者／『斜陽』)

ここでかず子が世間の偏見とのたたかいを「十字架」と称していることに注目したい。聖書の中で「十字架」に「かかって死ん」だのはもちろん「イエス」であるが、かず子が「イエス」を世間の偏見や無理解とたたかった人物として捉えていることが窺えるからだ。母の死後、世間に対し「戦闘、開始」を宣言し、独自の「道德革命」を実行しようとするかず子が意識の中で多大な犠牲を払うことを「十字架」にかかった「イエス」のイメージで捉えているのだ。

「五」はかず子の母の病状が急変し、遂に死を遂げるまでが描かれた個所であるが、ここには「イエス」の「十字架」をめぐる様々なイメージが描かれている。

まずかず子の見た夢である。夢の中でかず子は森の中の湖のほとりを和服の青年と一緒に歩いていた。湖のほとりには「HOTEL SWITZERLAND」という石のホテルがあり、庭には「アジサイに似た赤い大きい花が燃えるように咲いていた」。ここで青年から母の死を知らされる。長くなるが引用したい。

「寒くない？」

「ええ、少し。霧でお耳が濡れて、お耳の裏が冷たい」

と言って笑いながら、

「お母さまは、どうなさるのかしら」

とたずねた。

すると、青年は、とても悲しく慈愛深く微笑んで、

「あのお方は、お墓の下です」

と答えた。

「あ」

と私は小さく叫んだ。そうだったのだ。お母さまは、もういらっしやらなかったのだ。お母さまのお葬いも、とっくに済ましていたのじゃないか。ああ、お母さまは、もうお亡くなりになったのだと意識したら、言い知れぬ凄しさに身震いして、眼がさめた。

(傍線部引用者／『斜陽』)

この時点ではまだかず子の母は存命中であるが、既に結核が進行し確実に死へと向かっていた。かず子の夢は不吉な予感以上のものである。事実この夢を見て間もなくかず子の母は亡くなってしまふ。問題となるのは、かず子の夢がマタイ伝28章の「イエス」の復活の場面とよく似た構造を持っていることである。ポイントはいくつかある。「イエス」が十字架で処刑された後墓に埋葬されたこと。「イエス」の墓に行くのが「マグダラのマリヤ」をはじめとする女性たちであること。墓に行くとイエスの遺体はなく、代わりに御使いが待っていて「イエス」の復活を告げることの3点である。ここにかず子の夢を重ねると、かず子の母が既に死んで埋葬されていること。母の行方を捜しているのがかず子であること。青年がかず子に母の死を告げること。以上が類似している。すなわち、十字架刑の後埋葬された「イエス」と既に埋葬されているかず子の母、「イエス」の墓を訪れたマグダラのマリヤ<sup>9)</sup>と母の行方を探すかず子、「イエス」の行方を女性たちに告げた御使い<sup>10)</sup>と母の死を告げた青年がそれぞれ重なるようにイメージされているのである。

次に直治である。直治もまた母を「イエス」に喩えている。先に述べたように母の臨終の際、直治は母が死に近づいていることを感じつつマタイ伝26章41節「實に心は熱すれども肉體よわきなり」を基にして「我等は、何とも苦しくて、実に心は熱すれども肉体よわく、とてもママの傍にいる気力は無い」と冗談めいたことを語っていた。元来この聖句はゲッセマネの園で十字架を予見した「イエス」がだらしのない弟子たちを叱責したものであった。すなわち、直治は自分自身を「イエス」のだらしのない弟子に、母を十字架に架かる前の「イエス」に喩えているのである。

そして母が死んだ時、かず子は母の死に顔を「ピエタのマリヤ」に喩えた。「イエス」ではなく「マリヤ」であるのは前章で確認したかず子の母に付与された「聖母」のイメージによるものであろう。一見「イエス」とは無関係のように見えるが「ピエタのマリヤ」で悲しむ「マリヤ」が抱えているのは十字架で処刑されたばかりの「イエス」の遺体であり、当然ここにもまた「イエス」の十字架と密接な関係が見られる。

「六」は、かず子が「戦闘、開始」を宣言し、上原との恋に生きることを決意するところから始まる。先に述べたように、かず子はここで「イエス」が弟子たちを宣教のために送り出した時

の言葉をマタイ伝 10 章の大部分を引用している。聖書の箇所については繰り返しになるので説明を省略するが、大事なことはかず子が「イエス」の命令を受けた弟子の立場に立っていることである。しかも、かず子の決意を象徴するものとしてマタイ伝 10 章 38 節「又おのが十字架をとりて我に従わぬ者は、我に相応しからず。」が引用される。「四」の上原への手紙の中で「札つきの不良。私は、その十字架にだけは、かかって死んでもいいと思っています。」と書いたことと重なる。

「七」は、直治が自殺を遂げ遺書が残される。直治は遺書の中で「ユダの身内」という言葉を使う。ユダは元来「イエス」の弟子であり、「イエス」を裏切った人物である。直治もまた、麻薬中毒や借金の問題で母の信頼を何度も裏切った。直治がユダであれば、当然直治の母が「イエス」となろう。

以上、「イエス」のイメージと関連する箇所を順番に確認した。その結果、かず子の母には十字架をめぐる「イエス」のイメージが見られること。また、かず子や直治には「イエス」の弟子のイメージが付与されていること。さらに言えば、かず子にはマグダラのマリヤのイメージが、そして直治には裏切り者のユダのイメージが見られることがわかった。ただし、いずれにしろあくまでもイメージであり明確な形であらわれているわけではない。今後研究を進める必要が残されている。

#### 4. 「神」をめぐる言説～『人間失格』

「晩年時代」の太宰文学には「神」という言辭が頻出する。作品によってあるいは場面によって使われ方は異なるが、作品の主題とも関わるキーワードであることは言うまでもない。そこで「晩年時代」の作品の中で「神」という言辭が最も多用され、最も重要なキーワードとなっている『人間失格』を取り上げ、「神」をめぐる言説について考えていきたい。

『人間失格』は言うまでもなく大庭葉蔵の物語である。大庭葉蔵が「人間」である資格を有するのか否かが 3 葉の写真と 3 つの手記を通して問われている。問題はこれらの資料を手に入れた「私」から語られている点にある。「はしがき」と「あとがき」に登場する語り手であり作家である「私」は、大庭葉蔵に会ったことはなく知り合いから「精神病院に入院させられた狂人」という情報と共に写真と手記を手に入れた。つまり、「私」には手記を読む前から「狂人」という先入観が入っており、葉蔵の写真や手記もそうした先入観を補完するものでしかないのだ。

作品冒頭の「はしがき」で語り手の「私」は大庭葉蔵の 3 葉の写真を見た印象から語り出す。この時点で既に「私」の中には大庭葉蔵は「狂人」であるという情報があり、写真の印象もそうした前提でもって語られる。そのため、3 葉の写真はそれぞれ「不思議な表情の子供」、「不思議な美貌の青年」、「不思議な男の顔」というようにいずれも「不思議な」印象が語られる。さらに、この印象は後の 3 つの手記の読みにも影響を与える。3 葉の写真はそれぞれ「子供時代」＝「第

1の手記]、「学生時代」＝「第2の手記」]、「廢人時代」＝「第3の手記」というように手記と対応し、「私」が写真で見た「不思議な」印象の原因を手記が裏付けることになる。しかも、大庭葉蔵が自らの「恥の多い生涯」を総括してこれらの手記を綴ったのは、妻の姦通、麻薬中毒、精神病院入院という過酷な体験を通して「人間、失格」の自覚を持った「27歳」の時点であった。こうして『人間失格』は、写真による外貌、手記による内面の告白という両面から大庭葉蔵が人間としての資格を喪失した「狂人」であることを物語ることになる。

だがしかし、作品はそれだけでは終わらない。「あとがき」の最後に葉蔵をよく知る京橋のスタンド・バアのマダムの口から葉蔵が悪いのは父親のせいで、葉蔵自体は「神様みたいないい子」だったとこれまでの全く逆の印象が語られるからだ。それまでの「狂人」という評価が「神様みたいないい子」へと反転するのだ。しかも、「人間は神と悪魔の間を浮遊する」というパスカルの言葉を借りれば「人間失格」のはずの大庭葉蔵がもっとも「人間」らしい資格を有するという逆説も成立する。様々な形で反転がここに存在するのだ。

既に三谷憲正氏<sup>11)</sup>が指摘しているが、『人間失格』における「神」概念はキリスト教的な色彩を持っている。「第一の手記」では「尊敬される」という定義づけの中で、「或るひとりの全知全能の者に見破られ」る恐怖を語っている。「人間不信」についても、「お前はいつクリスチャンになったんだい、と嘲笑する人」がいるかもしれないとして、「人間は、お互いの不信の中で、エホバも何も念頭に置かず、平気で生きているではありませんか」と反論する。「第二の手記」では、故郷を離れ中学校に進学したことで、これまで家族を欺いてきた困難さを「神の子のイエス」ですら故郷では受け入れられなかったという。そして、葉蔵の道化を見破った竹一を自分の味方に引き入れるため、「顔に偽クリスチャンのような「優しい」媚笑を湛え」て懐柔策を弄している。いずれにせよ「神」をめぐる言説がキリスト教的な要素を持っていることは確かである。

そうした上で「第三の手記」では「神」あるいは「神様」という言葉がさらに多用される。概して葉蔵に関わる女性たちは「神」の愛の側面を信じる、あるいは体現する象徴——お祈りをすると何でも下さる「神様」を信じるシゲちゃん、「神の如き無智」で「信頼の天才」であるヨシ子——であるのに対して、葉蔵は「神」の厳しい側面——神の罰、地獄、復讐——を信じている点が特徴的である。どちらも、キリスト教的な「神」概念を追究したものであることは確かである。葉蔵にしても「神」の愛の側面を信じられないとしながら、罪の対義語を徹底的に追及する姿や「神に問う。信頼は罪なりや。」「無垢の信頼心は、罪なりや。」という「神」への真摯な問いかけは所謂無神論者とは明らかに異なる宗教的態度であると言えるだろう。ただし、キリスト教的風土にいない葉蔵にとって罪の対義語を見つけだすことは困難を極める。さらに、妻の姦淫の現場を目撃した時の衝撃も「神社の杉木立で白衣の御神体」「古代の荒々しい恐怖感」として、神道あるいは日本の神話的世界における古代の神々<sup>12)</sup>をイメージさせるものであった。葉蔵における「神」概念が「神」の厳しさという側面で構成されていることを例証するものと言える。



## おわりに

以上「晩年時代」の太宰文学の聖書の側面を、「教養」としての聖書、「聖母」のイメージ、「イエス」の形象化（『斜陽』）、「神」をめぐる言説（『人間失格』）の4つから考えてみた。「津軽疎開時代」では全体として「人生の教師」である「イエス」を描こうとする傾向が見られたのに対し、「晩年時代」は登場人物の「教養」を示す道具として聖書が引用される傾向がある。また、聖書を直接的にあるいは間接的に引用することで「聖母」や「イエス」など多様なイメージが交錯していることもわかった。さらに、聖書引用がなかったとしても「神」をめぐる言説は聖書の世界観が基となっており、結果として聖書的主題が追求されていた。このように見ていくと、「晩年時代」の太宰文学では、「津軽疎開時代」よりも多様な聖書引用があり、聖書を基とした多様なイメージが作品の中に盛り込まれ、より深い宗教性を持った作品世界を形成していると言えよう。それはまた自殺に至った「太宰」の苦悩の深さをも物語っている。

\* 聖書の引用は『文語訳（大正改訳）新約聖書（1950年版）』に拠った。

## 註

- 1) 長濱拓磨「津軽疎開時代の太宰文学の一側面——戦後文学と聖書——」（『京都外国語大学研究論叢』第80号，2012）
- 2) 赤司道雄『太宰治——その心の遍歴と聖書』（八木書店，1985・11）
- 3) 太宰は意図的に蛇と鳩を逆にして引用している。
- 4) 「トカトントン」でも同じ聖句が引用されている。
- 5) 2) に同じ。
- 6) 『大辞林 第3版』（三省堂，2006）
- 7) 青木京子「『斜陽』の女性像——西洋美術を中心として——」（『太宰文学の女性像』思文閣出版，2006・6）
- 8) この俗説を小説化したのが武田泰淳『わが子キリスト』（講談社，1968）である。
- 9) マグラダのマリヤは姦淫の現場で捕まり処刑されることを「イエス」に助けられた女性である。夫に別の男性との姦淫を疑われて離婚されたかず子の経歴とも重なる。
- 10) イエスの墓にあらわれたのは、マタイ伝では「御使い」、マルコ伝では「真っ白な長い衣をまとった青年」、ルカ伝では「まばゆいばかりの衣を着たふたりの人」、ヨハネ伝では「ふたりの御使い」と福音書によって異なる。かず子の夢に登場した「和服の青年」に一番近いのはマルコ伝である。
- 11) 三谷憲正『太宰文学の研究』（東京堂出版，1998・9）
- 12) 太宰は『津軽』において小学校の運動会の様子を次のように描写している。

国運を賭しての大戦争のさいちゅうでも、本州の北端の寒村で、このやうに明るい不思議な大宴会が催されて居る。古代の神々の豪放な笑ひと闊達な舞踏をこの本州の僻陬に於いて直接に見聞する思ひであつた。海を越え山を越え、母を捜して三千里歩いて、行き着いた国の果の砂丘の上に、華麗なお神楽が催されてゐたといふやうなお伽倻の主人公に私になつたやうな気がした。  
（傍線部論者／『津軽』）

## 参考文献

- 佐古純一郎編『太宰治と聖書』（教文館，1983・5）  
相馬正一『評伝 太宰治 第三部』（筑摩書房，1985・7）  
赤司道雄『太宰治 — その心の遍歴と聖書』（八木書店，1985・11）  
福永収佑『太宰治 キリスト教と愛と義と』（白石書店，1992・4）  
佐藤泰正『佐藤泰正著作集 5 太宰治論』（翰林書房，1997・2）  
野原一夫『太宰治と聖書』（新潮社，1998・5）  
三谷憲正『太宰文学の研究』（東京堂出版，1998・9）  
東郷克美『太宰治という物語』（筑摩書房，2001・3）  
遠藤祐『太宰治の〈物語〉』（翰林書房，2003・10）  
田中良彦『太宰治と「聖書知識」』（朝文社，2004・6）  
山内祥史・笠井秋生・木村一信・浅野洋編『二十世紀旗手・太宰治』（和泉書院，2005・3）  
青木京子『太宰文学の女性像』（思文閣出版，2006・6）  
相馬正一『太宰治と芥川龍之介』（審美社，2010・5）  
山内祥史『太宰治の年譜』（大修館書店，2012・12）